
ONE PIECEの世界に転生

鷹の爪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECEの世界に転生

【Nコード】

N1436Z

【作者名】

鷹の爪

【あらすじ】

主人公の翼（はつ）は、

ある日、自分の書こうとしていた二次小説の主人公に転生する。

原作に大幅な介入はしません。

作者は初心者なので過度な期待をしないで下さい。

転生？

「あーあ 今日も疲れたなあー。」

ガチャッ

「ただいま。」

「お帰り。」

台所から母さんの声がする。

俺の名前は翼つば 高校3年生だ。
俺はこの物語の主人公なんだ。

「とか現実逃避してる場合じゃねえんだよなあ、
受験勉強しなきゃいけねーんだった。」

「ふうー 一段落ついたし休憩すっかな」

俺はベッドに散らばった漫画『ワンピースONE PIECE』を適当に手に取り読み出した。

「やっぱりロブ・ルッチつええな。」

「ホントおもしれえよな。」

いいよなあ行ってみてえよワンピースの世界。

「ゲッポウ月歩」とか「トリトリの実」の能力使ってノリノリで空とか飛び

てえなあ。

突然だが俺は今、二次ファンでワンピースの小説を書こうとしている。

あらすじはこんな感じ。

物語の主人公、ウインは「トリトリの実」モデル“鷹^{ホウ}？を食った鳥人間。

ウインはサイファーポールN0.9に入っていたが、ある時脱け出しお尋ね者になる。

そして海賊になるという話。

「六式^{ろくしき}」が使えて「トリトリの実」を食っているという。

見ての通り俺の夢を詰め込んだ感じの話だ。

あらすじ的なものは思いついたけど、

それから先が思いつかないんだよなあ。

この後どうすっかな………

「寝るか。」

そして俺はベッドに寝っころがり眠りについた。

夢の中

抽選会場のようだ。

ガラ ガラ ガラ ポロ

「おめでとう御座います。」

抽選結果は翼さんに決まりました。
貴方は常識的に考えたら普通は叶わない様な夢を一つ叶える権利を
得ました。

どうぞ有効にお使い下さい。」

俺は気付いた時にはこう答えていた。

「じゃあ、ウインになってみたい。」

「かしこまりました。」

乗った船は・・・

目が覚めると俺は知らない場所にいた。
少し揺れているから地震かと思っただら船の上のようだ。
それともう一つ俺の体はボロボロだった。

ガタン！！

後ろから人影。

「ん！？」

どすっ！！

「うっ！！」

しまった首に手刀を入れら

・・・ばたッ

「・・・」

その男は無言でウインを運んで行った。

数年後

え？早い？んなこと言ったら漫画だってそうだろうよ。
まア何があつたかは、お楽しみで。

俺は今、^{グランドライン}偉大なる航路航海？を航海している。と言つか迷子だ。
因みにもうどこまで行ってるのか知らないが原作は開始している。
まアだからこうやって海に出たんだけでも。
あつ重要な事を忘れてた、俺は今女だ。
目が覚めたら女になってた。
でもそのおかげで追われずに済んでいる。
名前もウインから前世？の名前、ツバサに変えた。

「で、どうするかな？」

この状況。

「ん？なんだ！急に暗く」

ガゴンっ！！！！

「うわアデカイ船？潰される！！」

バキっ！！！！

「うわアー！！」

海賊船の上に、この船の船長と思われる男が1人。

「フェツ フェツ フェツ。」

ガゴンっ！！！！

「ん？」

バキっ！！！！

「何だ？」

「うわァー!!」

「人の悲鳴？おまえ見てこい。」

「ウオ!!まかせとけ!!」

ザバーン!!

そう答えた魚人の男は海に跳び込んだ。

「ん、此処は？」

「フェツ フェツ フェツ 目覚めたか？
此処はフォクシー海賊団の船の上だ。」

「あんた誰？」

「おれの名はフォクシー!!この船の船長だ。」

「俺はツバサ、助けてくれてありがとう。」

「礼はいらねエ、お前おれの仲間にならねエk」「いやだ。」

ずー・・・ん

「・・・・・・・・・・そんなに即答しなくても・・・・・・・・」

「オヤビーン！！海賊船だ！！」

「ホントか！？ フェツ フェツ フェツ。」

そうするとフォクシーは出ていった。

「まさかフォクシーにお世話になるとは・・・」

しばらくして

ドン ドォーン！！

「始まったか。」

ツバサは窓から様子を確認する。

“キバガエル海賊団？？”と言うことはこの後ルフィ達と戦うんじゃない・・・

「よっしゃー！！ラッキー！！！！！！」

ガチャ

「お前見にいかないのか？試合始まるぞ。」

「おお、見に行く！！」

がや がや わー

「ホントにお祭り騒ぎだな。」

「おい其処の兄ちゃん、焼きそば食わねえか？」

「食べる食べる！！幾ら？」

言っ
てな
かつ
たけ
ど服
装は
男物
でさ
らし
巻い
てい
る。

ん！？

「あっあれ。」

ツバサの指指す先には・・・

「おお、海賊船じゃねえか。」

しかも麦わら海賊団の・・・

「フェッ フェッ フェッ、今日はゲーム三昧だな。」

デービーバックファイト 妻わらの一味

ドン ドォーン!!

「ゲームを」

ウオオオオオ!!

「受諾した~~~~ア!!」

あ、始まった。

「見に行くか。」

「さーて野郎共っ!! 騒いじやいやん!!」

わー わー

「敗戦における3か条?を今から宣誓するわよ!!」

長いので以下省略。

一回戦「ドーナツレース」

「レディ~~~~イ」

パアア・ン!!!

「ドーナツ!!!」

ドドドドドオン

うわっ始まったよ、お邪魔攻撃。
相変わらずせこいな。

数十分後

「勝者!!!!キューティワゴン号!!!!」

「デイビーバックファイト一回戦を制したのは!!!!
我らがアイドルポルチエちゃ~~~~ん!!!!」

やっぱりノロノロビームせこいな、
なんか結果分かってても応援しちゃうね。

いやアゾロかつこいい。

「男なら.....!!!!」

フンドシ絞めて、勝負を黙って見届ける!!!!」

だって男でも惚れちゃうね。て、いま俺女だった。

「ゲームを制したのはなんと・・・！！！！
麦わらのルフィ〜〜〜〜！！！！」

三回戦終了したな？
さて原作介入だア！！！！

「ルールだ、さア早エトコ選べ！！！！
誰が欲しいんだ！！！！」

「海賊旗をくれ！！！！」

「待つて！！！！」

「ん？お前誰だ？」

「俺はツバサ、連れてってくれないか！！！！」

「いいぞ。」

「うおアッサリOKするのかよ！！！！」
確かにウソップ正しい。

「何か気に入った。」

「えーっ!!お前、おれの所には入らねエのk「うん。」

ずー…ん

「……………また即答……………」

「ぶ。ぶ。ぶ。」

「勝者!!“ 麦わらの一味?!!!!”

デービーバッククファイトこれにて閉会~~~~~!!!!”

わあああああああ!!

デービーバックファイト 麦わらの一味(後書き)

こんな入り方です。
すみません。

青キジ登場

「ーやっばお前ら・・・
今死んどくか。」ドン！！

「！！！！？」

俺たちは今海軍本部“大将？青キジと向き合っている。

そうだった、もうエニエスロビー編じゃん。

ブチブチ！！

青キジは近くの草を抜くと、

ガキイ・・・ン！！！！

「“アイスサーベル？”

能力で氷の剣に変えた。

「命取る気はなかったが・・・」

「・・・！！！！」

青キジはロビンを切りつけようとするが、
それをゾロが受け止めた。

ギイイ・・・ン！！！！

「！！！！」

ばっ！！「スライス切肉？」

其処へサンジが、

「シュート？」

蹴りを加えサーベルを手から放させた。
そしてルフィが突っ込んで来る。

「ゴムゴムの？オ」

その時サンジとゾロが掴まれ、

！！？「ウ！！！！」 「ん！！！！」

「フレット銃弾？オ！！！！」

「冷た！！」

パキ パキ パキ・・・腕や足を凍らされてしまった。

「うわ！！」

「ぐあア！！！！」

「おおあああつ！！！！」

これが海軍本部“大将？の力か・・・
やっぱり生で見るとスゲエな。

がばっ！！！！

「ロビン！！危ねエぞ逃げるオ！！！！」

パキパキ・・

「ロビンちゃん！！！！！！！」

パキン！！

「・・・・・・・・！！！！！！」

「うわあああロビン！！！！！！」

ドンッ！其処には凍らされたロビンが・・

「お前エ〜っ！！！！！！！！」

「わめくな・・・ちゃんと解凍すりやまだ生きてる。

ただし・・・体は割れ易くなってるんで気をつけろ、割れりや死ぬ。

」

「例えばこういつ風に砕いちまうと・・・・すう・・・

そう言いながら青キジは拳をふりかざす。

「ウウ！！！！やめろ！！！！」

「ロビン！！！！！！！！」

ブンッ！！！！ スカッ

「・・・・・・・・！！！！！！」

「ハア・・・あ・・・・危ねエ！！」

間一髪でルフィがロビンを抱いて避けた。

ザッ・・・「！！！！」

安心していられるのもつかの間、青キジの足が迫る。

ばっ!! ぐしゃ!!!!

「ぐへ!!!!!!」

どどど「ギャーギャー!!!!」どどどど

間一髪で今度はウソップが抱き抱えて逃げ、代わりにルフィが踏まれた。

「.....!!」

「ウソップ!!!! チョッパー!!!!」

そのまま船に走れ!!!!

手当てしてロビンを助ける!!!!」

「わ!! わかった」

「行くぞ!!」

「待つて!!」

「何だよ今急いでるん ！？」

「俺に乗れ!!」

其処には鷹がいた。

「お前、能力者だったのか!？」

「そんな事はどうでもいい、早く乗れ!!」

「お!!!! おつっ!!!!」

「お陰さまで……」

「だいぶいいわ……ありがとう船医さん」

「そんな……嬉しくねーぞコノヤロー」

「嬉しそうだな。」

「そついやアロビン、ツバサが此処まで運んでくれたんだぜ。」

「そつだったの、ありがとうツバサさん。」

「そつだったのかア!!!」

「そついやアルフィ、コイツ能力者だったんだぜ!!」

「トリトリの実の？鳥人間!!!」

「そつだったのか!!!すんげエ!!!」

「まあね。」

「ロビンちゃん、何か……体のあつたまるもん作るうか!!!
食欲はあるか?」

「……じゃあ

コーヒーを頂ける?」

「喜んで」

「ツバサちゃんもなんか食べるか?」

流石だな、サンジ俺のこと女だって気付いてるよ。

「別にいいよ。」

「ん？珍しいな、お前がナミとロビン以外にサービスするの。」

「うるせエマリモ、レディにはサービスするのが礼儀だ。」

「「「「え？ええええええ！？」」「」」」

「「「「女だったのか！！！！！！！！！！！」」「」」」

「うん。」

「みんな気がつかなかったのか？」

「「「「全然」」「」」」

「チョッパーも気付いてたの？」

「うんにおいで。」

バシヤ バシヤ バシヤ

「………んん？？」

「何だありゃ……」

ゾロが何か見付けたみたいだ。

「ん？」

「カエルだ！！巨大カエルだ・・・！！！！」

青キジ登場（後書き）

丸写しみたいになってしまった。

介入するのが難しい。

しばらくこんなが続くかも。

キャラクター紹介(前書き)

1日3000PV驚きです

キャラクター紹介

翼つばさ

身長169cm

この物語の主人公。

自分の書こうとしていた小説の世界の主人公になってしまった。
原作知識はエニエスロビーまで。

ウイン(男)

身長186cm

ツバサ(女)

身長172cm

主人公の書こうとしていた小説の主人公。

元CP9の「六式」ろくしき使いで、

「トリトリの実」モデル“鷹”ホークを食べた鳥人間。

CP9から脱け出し逃走していた。

命からがら逃げて乗った船で気を失ってしまった。

目が覚め起きて見ると自分は女になっていた。

それを逆手にとり名前をウインからツバサに変え生活する。

“水の都？ウォーターセブン”

「カエルだ！！！巨大カエルだ……！！！！」

「クロールで海を渡ってるぞ！！！！」

「あんなに急いでどこ行くんだ！！？」

「追うぞ野郎共！！！！」

カエルが向かって行ったのは、

「ん？あれは……灯台……！！？」

シフト駅^{ステーション}

建物から女の子が出て来た。

「あ！！」

大変だ！！ばーちゃんばーちゃん海賊だよ！！！！」

今度はおばあさんとウサギ？が出て来た。

「何！！？本当かチムニー！！！！」

よーひちよつと待つてりゃ。」

おばあさんは電伝虫を持って来た。

「あ……！！もひもひ！！？」

え〜と！！……！！何らっけ！？

忘れまひた！！！！ウイ〜ッ！！！！」

「酔っぱらいかよっ！！！」

酔っぱらいのおばあさんココロさんの話によると此処は海列車のシ
フト駅で、ステーション

ココロさんはこの駅長をしてるらしい。

この先にあるウォーターセブンには世界最高の船大工達がいるらし
い。

「……よし決めた！！！」

そこ行つて必ず“船大工？”を仲間にするぞ！！！」どん！！

「ほいじゃあコレな！！！」

簡単な島の地図と“紹介状？”

「じゃ行くわ！」

色々教えてくれてありがとうココロさん、チムニー！！！」

ルフィ達は、新たな仲間を引き込むべく、

“水の都？ウォーターセブンを目指す。”

「おいアレじゃねエのか？」

「島だっつ！！！！島が見えたぞっつ！！！！！」

「うおー!」

「素敵。」

「うおおっ!」

どーん!!

「何だこりゃ〜!」
「でっつけ〜噴水だ!」
「はーっ!」

「うは〜!」
「こりゃすげー。」

まさに産業都市!」

「港はどこかしら……。」

「あ、俺知ってるよ。」

「ツバサ知ってるの!」

「」
「」
「」
「」
「」
「」

「悪い悪い。」

「あ、俺ら海賊だから裏町の岬のほうがいいかも。」

「ありがとう助かったわ。」

「ツバサは此処に来た事があるの?」

「うん、てか住んだ。」

「へえー。」

あ、言い忘れてたけど、この体の記憶はあるよ。
それと翼^{おれ}自身の持つてる原作知識はエニエスロビー編までしかない。
その後はあまり知らない。

「よし!!ほんじゃ行ってきます!!」
「ぴう!!」

「待つてルファイ!!ウソツプ!!
あんた達私についてきてよ!!」

「どこに?」

「まずはココロさんの紹介状を持って“アイスバーグ?”という人を探すの、
ツバサも来てくれる?」

「ん?いいよ。」

「よし!!じゃあまアとにかく!!行こう“水の都?!!”
ん!!」

「……んん?ここだけ?町への入り口。」

「貸しブル屋??何だ?」

じーっ!!

急に俺の方を見てくる3人。

「えっ!?俺!?

あつ“貸しブル屋?っていうのは、ブルを貸してくれるとこで、ブルって言うのは海の馬みたいなもんで、

ここは水路が多いから住人にとっちゃんかかせない乗り物なんだ。」

「くくへえー。」「」

「じゃあ俺達も借りようぜ!」

「そうね。」

「すいませーん、ブル貸してください!」

「いらっしやいブルだね?何人だい?」

「4人!!」

「4人なら“ヤガラ?2匹でいいね。」

「荷物乗っけるから3匹のほうがいいんじゃないか?」

「ん?いいよ俺飛ぶから。」

「そっかじゃ2匹で。」

ザザアーツ!!!

「うおう!!!よし行けヤガラ!!!」

「ニーツ!!!」

今俺達は黄金を換金して造船所に着た。

「はつきり言うがお前達の船は、
わしらの腕でももう直せん……!!!」

「メリー号が直せねエって!!!?何でだ!!!」

ん!?!あれ?ウソツプがない、フランキー一家かな?

ん？話が一段落着いたようだ。

「ん？」

ルフィが何か気付いたようだ。

「何？」

「軽い……」

そういつてトランクを持ち上げる

「？ どうして？」

冗談やめてよ！！大金が入ってて軽い訳が……」

「「ギャ~~~~ツ！！！！」

「2億Bペレないっ！！！！」

「ウソツプもないよ！！！！」

フランキー一家の仕業なんじゃ！！！！」

「ルフィ急いで探すのよ！！！！」

「おおー！！！！」

ダーーーツ！！！！

「ねエ！！フランキー一家ってアジトはどこ！！！！？」

ナミはパウリーに聞いた。

「お前らが船停めてるっていう、

“岩場の岬？からずっと北東へ行った海岸にある「フランキーハウ

ス」だ。」

「ありがとう！……行こうナミ！」

ざわざわ

「！ 人集り……」

「あれウソップじゃない!？」

「え……
ウソップ!!！」

人集りの中に倒れていたのはウソップだった。

「ウソップ!! やったのはフランキー一家なの!？
あいつら!!!？」

「そつだ……俺が弱エもんで……!!!!」

「俺、皆に知らせてくる。」

「お願い!!！」

バサッ

ツバサは鷹になり飛び立った。

ゴインク・メリー
G・M号

「みんなー!!」

ゴインク・メリー
G・M号にむかってツバサが走って来る。

「あれれ!? ツバサが帰って来たぞ!!」

「ツバサちゃん何かあったのか?!?!?」

「みんな!!! 大変なんだ!!!
ウソツプが!!!」

水路

ツバサ達はウソップが倒れていた場所にきた。

「あれっ？ウソップがいない！！」

「場所が違エんじゃねエか？」

「うるせエよマリモ！！」

「いやここのはず！！」

「見て血だ。」

チヨッパーが血の跡を発見した。

「勝手に移動したのかも。」

ああああああ「？」

空から何か降ってくる。

「あああああああ」ガン！！
ポチャン！！

「ルファイ！！？」

「何やってんだてめエ！！」

「あ！！そつだお前ら大変なんだウソップが。」

「知ってるよ！！！！来い！！」

「今そのアジトへ向かう所だ。」

「早く行こう!」

“水の都？ウォーターセブン（後書き）”

感想待ってます

フランキー登場

フランキーハウス前

「ちょっと待ってるよ、ウソップ」

パキパキ!!

「あのフザけた家吹き飛ばして来るからよ……!!!!」ドン
今俺達は、また返り討ちにされてしまったウソップの仇を取りに来
た。

「パーティーテーブルキックコース?!?!!!」

ドガガガガ!!

「ギャー!!!!」

わああああああああ

「やべエ!!!!」

ちよっとコイツらまじでヤベエぞ!!!!!!」

「放て砲弾！！！！！」

「……紙^{カミ}絵^エ？（ボソ）」ヒラリ

すう……ドガンー！！！！

「何だ！？当たんねエぞ！！！？」

「残像斬り？！！！！！」

指銃^{シガン}を使うとややこしいからやめておく。

「消えた！！？ぐああ！！！」

わあああああ

俺らの攻撃によりフランキー一家はどんどん蹴散らされていく。

パキ……パキ……

「お前ら骨も残らねエと思え。」ドドンッ！！

あの後、ウソップは目を覚ましたけど、
原作通りメリーのことと決闘して一味から抜けた。

裏町の宿屋 屋上

「アイズのおっさんが……!?!」
ルフィが聞くと

「ええ撃たれて今意識不明だって……!?!」
ナミがそう答えた。

そうかも暗殺未遂の事件かあ

「ちょっと行ってみる」

そういうとルフィは乗っていた建物の屋根から飛び降りた。

「待ってルフィ、私も行くから。」

「俺も行くよ。」

1番ドック

「……すごい人望……
近づけそうにないわね。」

ズン ズン ズズズ
ン

「？」

急に音楽が流れ始めた。

「出たー！！！！」

「この島から出ていけー！！」

「しばり首だー！！！！」

すごいブーイングの嵐の中、建物の屋根の上に現れたのは、アロハシャツに海水パンツ一丁の変態。

「そつだ、おれは人呼んでワアオ！！！！」

「んーっ！！！！フランキーっ！！！！！！」ドドオーン！！！！

「出て来い“ 麦わらア？！！！！！！”

「・・・・・・・・何だあの変態・・・・・・・・」

「・・・・・・・・！！」

フランキーって・・・・言わなかった！！！！？」

「・・・・・・・・！！！！？」

あいつが・・・・・・・・！！！！！！」

「おい！！！！」「ルファイ！！」

ルファイがフランキーに向かって叫ぶ。

「？」

「海水パンツ！！！」

「あん！！？」ギロ・・・

ザワ・・・

「おれがルフィだ。」ドン！！！！

「お前かア・・・」麦わらのルフィ？つてのア。

人の留守中に、えらく大暴れしてくれたじゃないの、お兄ちゃん・・・！！！！」ゴオオオオオオオ

「ナミ、ルフィが喧嘩始めると思うからここから離れよう。」

「そうね。」

ツバサはナミを乗せてその場を離れた。

「“ストロング右^{ライト}？！！！！”
ポウン！！！！」

「！！！！？」

フランキーのパンチが、
肘から下のちよつと真ん中らへんから外れ、
鎖が伸びて飛んだ。

ドゴン!!!

そのパンチは見事命中し、ルフィを吹き飛ばした。

「何!?!」

驚くナミ、それにしてもすごいな“改造人間?”。

ジャララ・・・

伸びたフランキーの腕が戻っていく。ガシン・・・

ボコ・・・ どさっ!!!

「ルフィ!!!」

「何今の!!!」

「腕が外れた。」

「……………あア、知らなかったのかい……………お姉ちゃん達。」

右腕を左手で伸ばしながら話す。

「じゃあ教えとこうか……………」

おれは“改造人間?だ!!!”ドン!!!

襲撃犯

1番ドック

フランキーとルフィのケンカをしている所に、
ガレーラカンパニーが割り込んで来た。

「くだらねエマネしてくれたな。」

「？」

「身に覚えがあるだろう・・・!?
よくまたここへ顔を出せたもんだ。」
パウリーが聞いてくる。

「・・・・・・何で？」

俺たちおっさんのニュース聞いて・・・」

「とぼけるんなら・・・・・・
締めあげるまでだっ！！！！」ばっ！！

シユルルルル！！！！ 「うわっ！！！！」

ロープアクション

「R・A “ハーフノット？！！！！”」

袖から出てきたロープはルフィの首に巻き付いた。

「ウエエッ！！！！苦しい・・・苦・・・！！！！！！！！」

「 “エア・ドライブ？！！！！”」

投げ飛ばされるルフィ。

「ぶへ！！！！」ドゴオン！！

「やつちまえー！！ガレールカンパニー！！！」

わああああああ

「社員最強の5人のケンカだっ！！！」

わー わー

「え？？何で？？何で船大工もみんな敵なの！？」

ザザアツ ドダウン

「何か誤解されてるのかも。」

ガ ガ ガ ガシャン！！

ボコオン！！

「くそオー！！」

何なんだ理由くらい言えエ！！！」

「理由を知りてエのは俺たちの方だ・・・！！！」

「昨夜 本社に侵入して、

アイスバーグさんを襲撃した犯人はお前らだろうが！！！！！」

「？ 何それ。」

「ばか言え何で俺達がそんな事するんだ！！！」

怒鳴るルフィ。

「犯人？を二人憶えているとアイスバーグさんが証言したんだ。

政府に聞きゃあお前らの仲間だと言っじゃねエか・・・

“ニコ・ロビン？って賞金首はよ！！！！”

「捕まえるオ!!!暗殺者共を逃がすなア!!!」

「やめてよ!!!」

放してつてば、私達が何したつていうのよ

「とぼけるな、暗殺者の一味め!!!」

よくもアイスバーグさんを撃ちやがったな!!!
逃がさんぞ!!!」

「ナミ!!!」がしつ!!!「あつ!!!」

ツバサはナミを助けようとしたが捕まってしまった。

「くそお!!!」

おい!!!やめろお前らア!!!

おれ達はなんもしてねエ」

「いつまでも言いはってるがいい。

観念しろ、海賊。」

「ぶつ潰せ!!!ガレーラカンパニー!!!」

わああああ

「いえーい!!!」

アツハツハツハツハツハ!!!」

ちやぶだいでお茶を飲んでいるのはフランキーだ。

「気分爽快だわいな！」

「そうそうあんな奴ア吹き飛ばしちまえばいいんだ！！
さすがはおれ達の誇り！！！」

“ガレーラカンパニー？！！！！”

「いやいやいや、

しかしお前、その麦わらのチビは、

我がフランキー一家の憎つき仇だよ！

まずこのケンカの先客はおれだったんだよ！

そこへきてお前ら、

おれの獲物を横取りする様なマネをすんなと……………」

「何度言わすんじゃクラアア！！！！！」

おんどりやああ！！！！ガシャアーン！！

そう言つてちやぶだいを投げ飛ばした。

「コネクターセット……………」ガチツ ガチツ

「これでさっき巨大クレーンを倒したんだ！！！！！」

「クレーンを……………？大砲か？」

「「「やっちまえだわいなアニキ……………！！！！」」」

ブオオ……………！！！！「なアに砲弾なんざ飛ばさねエよ
飛んでくのは……………」空気の弾？

ただし……………速度は風の領域を越える。」

「空気？」

「危険だ逃げる~~~~~!!!!」

ぶくつ!! ギリ・ギリ・

「アア~~~~~つ!!!!」

「クー・ド・ヴァン風来砲?!!!!!」

「!?!?」

ベコオン!!!!

「うああ~~~~つ!!!!」

吹き飛ばされる職人達。

「痛・・・っ!!!!」

何だ!?!?

“風圧?に・・・激突されたみてエな・・・!!!!ハア・・・ハア
ガラ・・・

「作りかけのガレオンごと・・・!!
1番ドックが崩壊したア~~~~つ!!!!!!」

「ナミ、ツバサ!!!走れ!!」

何とかしてアイスのおっさんとこ行こう!!!!」

「おいみる!!」
「麦わら?が逃げるぞ!!!!!!」

がしー!!「しっかり捕まってるー!!」
ぴょーん

「本気でいくの!?!」

「あたり前だアイスのおっさんが、
何でロビンを犯人だと言ったのか直接聞いてくる。」

「慎重に行けよ。俺らは追われる身だ。」

「じゃ行つて来る。」ぐいーん

「え……ちよっ……!!!!!!」

バリィン!!!!!!「!!!!!!」
ルフィは窓から突っ込んで行った。

「あのバカ!!!!」

ナミ、俺様子見て来る!!!!」

「お願い!!!!」

バサア!!!!!!

アイスバーグの寝室

「昨夜 おれはニコ・ロビンをこの目で見た……！！
彼女はお前の仲間……それが事実だ。」

「それは本当にロビンだったのか？」

ガチャ

「誰だ！！？」

「驚かせてすいません。ツバサと言います。」

「海賊小僧の仲間か？」

「はい。」

「何の用だ？」

「貴方を殺そうとしたのは、
俺達じゃありません。」

「そんな事か・・・口を開くな、お前の言葉にやあ、もう力はない。」
「力チヤ・・・」
「そう言つて銃を構えた。」

「貴方を襲つたのは、シービーナイン“CP9”です。」

「それは噂だろう。シービーナイン“CP9”なんてものは存在しない。」

「いいえ、噂ではありません。」

「何を根拠に・・・。」

「何故なら俺は・・・元シービーナイン“CP9”だからです。」

「なんだと!?!?」

「何だ?そのCPなんたらつてのは。」
「ルフィが聞いてくる。」

「サイファーポール9?ナイン」

“正義?の名の元に政府対して非協力的な「市民」への・・・
「殺し」を許可されている、特別な9つ目の機関。」

「正義と名のつく殺しがあつてたまるか!?!!」

「奴らはきつと貴方の持っている“設計図”を狙っている。」

「何故それを知っている!?!?」

「言つたでしょう俺は元シービーナイン“CP9”だつて。」

「元“CP9”？何だったら誰が犯人なのか分かるんだろう？
それとニコ・ロビンについてはどう言いわけする？」

「それを知って本人達の前で平然としていられますか？
それとロビンについてですがそれは何とも・・・
今、彼女は何処にいるのか、わかんないんです」

「・・・」

「じゃあこれで俺らは行きます。
俺らが出たら壁をその銃で撃ってください。
その方が誤魔化し易いです。
ルフィ行くよ！！！」

カチャ

バサア

「何の話だったんだ？全く分かんなかった。」

「ゴメン後で話すよ。あ、おーいナミィー！！！！」

「あんた達話長すぎ。」

「捕まったんじゃないかと心配したのよ！！！！」

「「ゴメン。」」

「みんなを探そう、

何を聞いたかは後で話すよ。」

襲撃犯（後書き）

文才がア！！！！

作戦開始

『事態はもつと悪化する。』

今日限りでもう……あなた達と会うことはないわ。』

「……ロビンは、

確かにそう言ったんだなチョッパ！」

ゾロが聞いた。

「うん。」

「今日限りでもう会う事はねエってんだから、

今日中に何かまた、事態を悪化させるような事を、

するって宣言してる様にも聞こえる。事態を更に悪化させられると

すれば……

その方法は一つだ……」

「今度こそ“市長暗殺”？」

「事が起こるとすりゃ今夜だ。

“現場？へは？”

「行く」

「行くのは構わないけど……問題があるのよね。」

サンジくんはロビンが誰かと歩いてるのを見たと言ってたでしょ、アイスバーグさんも・同じ証言をしてるの“仮面を被った誰か？”って。

急にロビンを豹変したのはそいつが原因なのよ!!」

「みんなちよつといいか？」

「何？」

「実を言つとおれ……5年前まで政府の人間だったんだ。」

「え!？」

「サイファーポール？世界に8つの拠点を持つ政府の優れた諜報機関。」

俺はその内のあるはずのない9つ目のサイファーポールにいたんだ。」

「あるはずのない9つ目の……」

「アイスのおっさんにも言ってたやつか。」

「5年前、俺達の所へ任務が来た。ガレラカンパニーへの潜入調査だ。アイスバーグさんは“ある物？”の設計図を持っていた、それを奪うためにだ。」

その時、任務のメンバーに指名されたのが……おれとルツ

チ、カク、カリファ、ブルーノの5人・・・」

「もしかしてそれがこの事件の犯人？」

しかもカクってウソツプに似ている奴じゃ・・・」

「アイスのおっさんに教えに行くぞ!!」

「待つて!! 教えたらアイスバーグさんは確実に殺される、それに信じて貰えないと思う。」

「ツバサの言う通りだ、ヘタに動かないほうがいい。」

「奴らが動いたらおれ達も動こう。」

「分かった。」

じゃあ、行こう。」

本社前の木の上

ビュオオオオオ・・・がさっ

「ちよつと遠いぞ!」

「腕伸ばして飛んでけばいいでしょ!!
騒ぎが起こってからね。」

「そうだなこつちが先に騒ぎを起こしちゃ、それを利用されるだけだ。」

「すごい数の護衛だ・・・(汗)

みんな武器持ってて強そうだぞ!!」

双眼鏡を覗いて様子を見るチヨツパー。

「・・・それやそうでしょ。」

海賊だつてねじ伏せちゃうのよ、

ここの船大工達は。」

「何か動きがあつたら、すぐ教えるよ。」

つてツバサ!? お前何服脱いでんだ!？」

「何つて、ちよつと見てくるだけだよ?

服着てる鳥なんておかしいだろ?

それにさらし巻いてるからいいじゃん。」

「そういう問題じゃねエ!!!」

「あ、ズボンも脱がないと変かな?」

ぼかつ!!

「痛エー。」

「あんたは女なんだから、

少しは恥ずかしがりなさい。」

カチャ

「これ着ければ飼われてる鳥に見えるんじゃない?」

そういつて俺に首輪を付けてくれた。

「ありがとう。じゃ見てくる!!!」

バサッ

ビュウウウウウ

バサッバサッ

さてと・・・アイスバーグさんはどこかな？

ドォン！！！！

！？始まったか・・・

CP9の強さ(前書き)

サブタイ思いつきません。

バサッバサッ

「あれっ！？いない！！」

さっきまでルフィ達のいた所へ戻って来ると誰もいなかった。

「先 رفتか・・・」

ドカァン！！！！

「ん！？あそこか！？」

窓を覗くとアイスバーグさんとパウリーが倒れていた。

「だいぶ進んじまってんな。突っ込むか・・・」

ビュー!! ドカァン!!

「!?」

「ツバサ!？」

「仲間か・・・」

「ロビン!？」

何で勝手にいなくなるんだ!!!」

まあ理由は知ってるんだけど
ね・・・

「・・・あなたまで。」

私の願いを叶える為よ!!!

あなた達と一緒にいても決して叶わない願いを!!!

・・・それを成し遂げる為ならば私は、

どんな犠牲もいとわない!!!」

「悪いがそこまでにして貰おう・・・」

我々はこれから重要人物を探さなきゃならないんだ、急いでる。カリファあとどれくらいだ？」

「……あと2分よ」

「突然だが……あと2分で、

この屋敷は炎に包まれる事になっている。

……君達も焼け死にたくなければ、速やかに屋敷を出る事だ。

まアもちろん……

それができればの話だが。」

ヒュッ！！

ドゴオン！！！！

「ルファイ！！ゾロ！！！！

何なの……！！！！？

あいつらの強さ……！！！！」

ルファイ達は「六式」の前に軽く捻られてしまった。

「……環境が違う……！！

我々「CP9」は物心ついた頃より、

政府の為に命を使う覚悟と、

“人体の限界？を超える為の訓練を受けてきた……

そして得た力が6つの超人的体技「六式^{ろくしき}」。

よく身にしみたハズだ。

世界政府の重要任務を任される我々4人と……

たかだか一海賊団のお前達との、

ケタ違いの戦闘力の差が……！！！！
最後に……

面白いものを見せようか……」

「……………！！？」

え……………！！？？」

「？」

うわああああ！！！！」

「“ネコネコの実？……

モデル“豹？”」
レオバルド

「……………！！！」

“ヒョウ人間？か……” 「でけエ。」

「ルツチ、職人達が上がってくるわ！」

「……なアに来れやしない……

「嵐脚」「ビュツ！！」

ドゴゴゴゴォーン！！！！

斬撃が飛び部屋の壁を斬り裂いた。

「壁から離れる！！チョッパー！！ナミ！！！！」 「わ！！！！」バキ
バキ

ダダッ！！ いきなりパウリーがアイスバーグに向かって走り出した。

「あなたを必ずここから連れ出す!!!」
「無理だ、お前そのキズで……!!!」
「どうやって!!!」

「おやめなさい、パウリー。」
カリファーが言った。

「ハア―
……おれは少なくとも……!!!
今までお前らを本当に“仲間?だと思つてた!!!”

「……お前だけだ……」ギラッ
ルッチは左手を構えた
「!!!」

「ハトのやつ~~~~!!!」ドカーン!!!「!!!」
ルフィはルッチを殴った。が、

「麦わら!!!」
ギラ……「指銃^{シガン}」
ド キ ユ ン!!!ズボッ!!!

ルッチの指はルフィの体を買いた。
「……!!!」
ウ……オ……」

「ルフィ!!!」

ガッ!!!

「島の外まで……飛べ!!!」
ボ コ オ ン!!!

ルフィは壁をつき抜けて飛んで行った。

「うわぁ~~~~」

「……」

「ルフィ!!!!」

「ルフィ~~~~!!!!」

ナミが叫ぶ。

「てめエ!!!!」 「テツカイ鉄塊」。

ギイン!!!!「!!!!」

ゾロが斬りかかるが鉄塊で守られてしまった。

シュツ ドゴオン!!!!「ぐハ!!!!」

「ゾロ!!!!」 「バコオン!!!!」

「お前もだ……」

ゾロもまた、屋根をつき抜け飛んで行った。

「おい!!!女が一人上階から落ちてきたぞ!!!」

そこにはナミが倒れていた。

「こいつは!!!!」 「麦わら?の仲間だ!!!」

「間違いねエっ!!!!」

捕まえて仲間の居場所を吐かせよう。」

職人達は必死の消化作業をしていた。

「ダメだ、風に負けちまう!!」

「全然火が消えねエぞ!!」

「まだ中に誰かいたら・・・!!」

「これじゃもう助からねエ!!」

その時、

「え!!?」バリイン!!!

窓を突き破って何か出てきた。

出てきたのは・・・

ズダン!!

「鳥とトナカイ!!??」

「アイスバーグさんと・・・!!」

パウリーさんを背負ってるぞ!!」

「ハア・・・ハア・・・」ヨロ・・・

(ナミ・・・!!)

大変だ・・・治療して・・・やんなきゃ・・・

フラ・・・「!」ドサ・・・

「!?」

急いで人型になって近づく。

「チヨツ・・・」駄目だ俺も体が・・・

ドサ・・・

「能力者だ……！」

「す……！！！！すぐに手当てを」

「すごい火傷だ……！！」

「おい……！！コイツらどうする？」

「そいつらもだ……！！命の恩人だぞ……！！！」

“ロケットマン”？出航（前書き）

150000PVです！..！

ありがとうございます！..！

“ロケットマン？出航

『・・・・・・・・・・じゃあお前の“願い？つてのは・・・・・・・・！！！！”』

『「私を除く麦わらの一味の7人が、無事にこの島を出航する事。」』

『その為なら兵器も呼び起こし、世界がどうなるかと構わねエつてのか！！？』

『構わない。』

「おれは引き鉄を引けなかった。事もあるうちに、全世界に生きる全ての人間の命より、あの女はお前達7人の命を選んだ。」
私達の為・・・・・・・・！！！！

「よかった・・・・・・・・ロビンじゃあ・・・・・・・・私達を裏切ったんじゃないんだ・・・・・・・・！！！！」

その後、職人達にも協力してもらって駅に向かうも、
“海列車？は出港した後だった。”

しかしルフィとゾロは見つかり、

船を貸して欲しいと船大工達に頼むが断られてしまった。

その時、ココロさんが・・・

「死ぬ覚悟があるんなら・・・

ついてきな、出してやるよ“海列車”？。「ドン！！

「さア海賊共、ふり落とされるんじゃないよ！！！！」

シュツシュツ シュツシュツ

「ウォーターセブン発エニエス・ロビー行き、

“暴走海列車”「ロケットトマン」！！」

「よし！！！！出航！！！！

行くぞオ！！！！全部奪い返しに！！！！」

ポッポ~~~~！！！！

麦わらの一味とガレーラの職長3人とフランキー一家を乗せロケットトマンは出航した。

「フランキー一家とも、
ガレーラの船大工達とも、
町じゃゴタゴタあったけど、
この先はここにいる全員の敵は同じだ!!」

このシーンのルフィカッコいいよなア、
しかもそれを生で見れるなんて・・・
ってんな場合か!!

「ーせつかく同じ方向むいてるもんが、
バラバラに戦っちゃ意味がねエ、
いいか、おれ達は同志だ!!!!」
ガシッ!!

「先に出た“海列車”には、
おれ達の仲間も乗り込んでる!!!!
戦力はまだ上がる!!!!
大波なんかにはやられんな!!!!
全員目的を果たすんだ!!!!
行くぞオッ!!!!!!」

「ウオオオーッ!!!!」

ブルルルル・・・」

「ナミ、どうしたの?」

「鳴った、子電伝虫。」

『ナミさんナミさん聞こえるか!?!』

「うん!!サンジ君ね!?!」「えっ?サンジ?」

『ん?ツバサちゃんもいるのか。』

こちら、ちょっとアホ二人のせいで、
マズイ事になってきた。
そっちは随分賑やかだな。』

アクア・ラグナ
「高潮だよ。」

『なるほど。』

「もしもしサンジ君!!?」

ロビンの行動の理由と、

私達の今の状況を全て話すからよく聞いて!!」

ナミはあった事などを全て話した。

「ぶは、面白かった。」

ん、戻って来たか。

「ルフィ!!こっち来て!!」

「ん?」

「サンジ君!!」

『おう、ルフィか!!』

「サンジっ!!」

そっちどうだ!?!?ロビンは!?!?」

『ロビンちゃんは、』

・・・まだ捕まっただまだ。
ナミさんから今事情を聞いたところ。
・・・全部聞いた・・・」

「・・・そうか、
いいぞ暴れても！」

「ルフィ！！無茶いな！！
おれ達が追いつくまで待たせろ！！
おいコック聞こえるか！！
その列車にはヤベエ奴らが「いってゾロ！！
お前ならどうした。」「！」
「止めたってムダだ。」

「・・・わかってなア。
おうマリモ君、
おれを心配してくれんのかい？」「するかバカ（怒）」

「だが残念、
そんなロビンちゃんの気持ちを聞かされちゃあ・・・
たとえ船長命令でも
おれは止まる気はねえんで！！！」ドン！！
バキッ・・・！！サンジは電伝虫を握り潰した。

“ ロケットマン？出航（後書き）

丸写しに近い気が・・・！！！！

感想、質問あれば下さい！！

待ってます！！

“ エニエス・ロビー？到着（前書き）

20000PV突破ありがとうございます！！

「あの人作戦全然わかってねえ〜っ!!!」

「無駄だった」

ナミが肩を落とす。

「『わかった』って言ったよな。」

「5分“待つ”とかムリだから。」

「そりゃそうか。」

「んががが、気の早エ奴らね。」

「いけー!!海賊兄ちゃん!!」

「遅れをとるなソドム!!ゴモラア!!!」

「バヒヒヒ〜ン!!!」

フランキー一家達も突入して行った。

「さてと、俺達は気長に4分待つとするか。」

「ツバサ、思ったんだけど。」

ナミが思い出したように話しかけてきた。

「何?」

「その服動きにくくない?」

「え?まア確かに・・・」

ん?ナミその手は何?」

ナミが怪しく指を動かしながら近付いてきた。

「決まってるじゃない。」ニコッ

「え？やめ！！うわああああああ！！！！！！」

「ハア、疲れた。」

着替えさせられましたよ。

露出度の高い服に………上だけ。

谷間が見えるウ！！！！

下だけは必死に頼んでジーパンにしてもらった。

「ツバサちゃんビュ〜ティフォ〜！！」

気持ちわるっ！！普通にしたらカッコいいのにな。

「ヘエーあなたスタイル良かったのね、

いつもあんな男物の服しか着ないから勿体ないわ。

そうだ！！！！」

そう言うとナミは俺の服を掴み……

「え……」ボチャン

「俺の服………」

捨てた……海に……

「何してくれとるんじゃないア！！！！」

「んなことしてる場合か？」

ゾロが呆れた様子で言ってきた。

「あ、すいません。」

「おれは作戦通り外行ってくる。」

『「さア5分たったよ。」

ポチポチいこうかね……………」

「おいはあさん……！」

前の方からゾロの声がする。

「ん!?何らい……！」

「

『おめエら作戦変更だそうらよ……！』

全員車両にしっかりとしがみつけと言ってるよ……！」

「おうアホ剣士……何かあったか……!?」

「「正門」を閉められた……！」

「何だとオ……!?」

「大変だ……門にぶつかると……！」

「心配無用……道はある……！」

柵をつっぱれカエル……！」

「ゲロオ……！」

ドガシャアン……！グニャ……！……！

曲がった柵に乗り上げ海列車は……

「海列車……!?」

「飛んだアア〜!!!」

「死ぬーっ!!!」

「ナミさん早くおれの胸の中へ!!!」

「ゾロ、あんた着地の事、

考えてあるんでしょうね!!!?」

「任せろ!!!」「ゲロ」「運に。」

「運任せかー!!!」

「おれ死にたくないから出るわ。じゃがしっ!!!」

「逃がすか!!!」

鳥になって窓から出ようとすると足を掴まれた。

「前に巨人ーっ!!!?ぶつかるーっ!!!」

「ウソッあいやそげキングうるせえよ。」

「ツバサひどっ!!!てうわああああ!!!」

ズド オン!!!

「どへーっ!!!」

巨人が唸なり声をあげる。

ロケットマンはもろ巨人にぶつかり落ちた。

「あいたたたた。ん?」

辺りを見回してみるとナミが攻撃の準備をしていた。

「サンダーボルトテンポ?!?!」

バリバリッ!!ドカアァン!!!!

「ぎゃあああああ!!!!」

「————って無差別かーっ!!!!」

ガン!!!!「いでー!!」

「そげキンググー!!!!」

ナミが何故かそげキングにつっこんだ。

「うわ、すげー迫力!!!!」

「てめエナミ!!!!何してくれてんだ!!!!」

「んナミさん、おれは今君に出会った衝撃を思い出したよ!!!!」

「サンダーボルトテンポ?はゾ口達にも当たっていたようだ。」

「——ところで、先突っ走ってった、
あ…アホはどこにいるんだ?」

「さア、この島も狭くはないから、
探すとなると……」
ボカア……ン!!!!

向こうに見える建物が崩れる。

「……」
「絶対あそこだ!!!!」
「……」
「それじゃ……追いかけるか。」

「待て!!!!こっちへ乗れエ!!!!」

「バヒヒヒ……ン!!!!」

フランキー一家の巨大ブル“キングブル”が走って来た。

「助かったーっ!!!!」

俺達は“キングブル”に乗りこんだ。

“ 宣戦布告？（前書き）

ユニーク40000人突破ありがとうございます！！

“ 宣戦布告？ ”

『 エニエス・ロビー本島全部隊へ！！！！
海賊達が「裁判所」前広場へ到達した！！
全兵直ちに「裁判所」前広場へ！！！！！！』

俺達は“キングブル？やパウリー達の活躍で、
ついにルフィのいる「裁判所」の前まで来た。

「 艶美魔？^{えんびま}」ユラリ・・・ユラリ・・・

「 なんだ！！？刀が曲がって見える。」

「 “夜不眠？^{よふみ} ”

“鬼？^{おに} “斬り？^き！！！！” “どん！！”

「 ぎゃあああ。」

ダッ！！

「 さア行くぞ、道があいた。」

「 うん」

「 うおおおおおおお！！

待て待て待てエ！！！！

そこを退かんかトナカイにバカ剣士！！」

ドヒュン！！！！ド ドド ドド ド

「 この危険な敵陣！！

ナミさんとツバサちゃんの進む道は、

このおれが切り開くのだ！！！！どけい！！！！」 おらアああ

サンジがゾロに蹴りかかった。

ガキーン！！「うわ！！危ねエてめエヤんのかコラ！！！！」 (怒) 「

「ええ!!!? 何でケンカ始めてんだ!!!?」

「ナミさん、ツバサちゃんこっちだ!!!」

おれにのみついてきな!!!」

「あのね、私達ロビンを助けに来たんでしょ!?!」

「おお・・・そうだロビンちゃんが・・・!!!」

おれの助けを待ってるんだ!!!」

今頃寂しくて泣いてやしねエかな。」

ついて来いとか言ってたのに、

先に行っちゃったよあの人。

「ん? あー!ー!ー!」

目を離れたスキにゾロが!!!」

チョッパーのしている方向を見ると、

ゾロが反対方向にむかい走っていた。

「階段つて言ったのに、

どう間違ったらそっち行くのよ!!!」

「俺連れ戻しに行くよ。」バサツ

それを見ていたフランキー一家達。

「アニキは助かるんだろうか。」

「やる時ややるタイプなのさあいつら。

きつと。」

「もう・・・!!」

「有罪、有罪。」ジャラ・・・

「何なのよ一体こいつら!!!!」

俺達の目の前には鎖つきの鉄球を持った“陪審員?”がいた。

「ストーカーじゃない?」

こいつらの格好キモ過ぎ。

トゲ付きのブリーフみたいなの履きやがって。

「有罪!!有罪!!」

「行くわよ!!チヨッパァ!!ツバサ!!!!

間違えた!!行くのよ!!チヨッパァ。」

「あっおれ一人!!?」

「私達/俺ら女だもん。」

「龍?」「!!!!?」「巻き?!!!!!!」

ズバァン!!!

「え!!!?」

「オオ……!!!」

いきなり床が崩れ、目の前の“陪審員?”が倒れた。

「ちよつとこの床も危ねエ!!!」

「何なの!?下に何かいるの!!!?」

「ゾロじゃない?」バサツバサツ

「ズルっ一人だけ飛んでる!!!」

「しょうがねエ」生命帰還「解除。

ほら掴まれ!!!」

がしっ!!!「うわツバサが大きくなった!!!」

ボツカアア……ン!!!

「いやあああ〜」

とんっ! 着地成功。

「あつぶねエー。」

おっ!!!屋上じゃねエか。」

ガラ……」ふう……

始めからこうやって登りゃよかった。」

穴の中からゾロが出て来た。

「ゾロ!!!やっぱりアンタか!!!(怒)」

「おらあああ」ボツコーン!!!

サンジも来たようだ。

「あいつら・・・やりやがった・・・!!」

「海賊達が・・・!!」「世界政府」に!!
「宣戦布告しやがったア~~~~!!!!」

「正気か貴様らア!!!!」
「全世界を敵に回して生きてられると思うなよオ!!!!!!」

「望むところだア~~~~!!!!」
「ウオオオオオオオオ!!!!」

「ぎゃあああああ。」「
「言い返されてビビってるよ。」

「ロビン!!!!」
「まだお前の口から聞いてねエ。」

「.....!?!」

「「生きたい」と言えエ!!!!」

「「ロビン!!」「ロビン!!」

「生きたい!!!!」
「.....!!私と一緒に海へ連れてって!!!!」

「うお~~~~ん。」

おめエら好きだーチキシヨ~~~~!!!!」
それを見ていたフランキーが泣いている。

ガコン・・・「!」

「跳ね橋が下りるぞー!!」

ゴゴゴゴゴゴ

「あいつらうまくいったみてエだな。」

「ム・・・武者ぶるいが・・・」ガタ ガタ
そげキングあんた恐いだけね。

「早く下ろせ。」うず うず

「悪そうな顔・・・!!」

「行くぞー!!!!」 ドン!!

ボキ ボキ

ゾロは今にも刀抜きそうだし、

ルフィ指鳴らしてるよ、やる気満々だな。

俺も頑張ろう!!

“ 宣戦布告？（後書き）

感想ください！！

“ 麦わら海賊団？ V S “ C P 9？ 開幕

司法の塔 入り口

「あそこに階段がある！！

早くロビンとこいくぞ！！」

「待て。」 「！！！！？」 「何だありや！！！」

呼び止めたのは六式使いフクロウだった。

「チャパパパパ・・・！！

侵入されてしまったー！！

さっきの部屋へ行っても、

もうニコ・ロビンはいないぞー

ルツチが“正義の門？へ連れてったからな。」

「え！？」 「あ・・・あと長官もな。」

「今向かってるところだが行き方も教えないし、

おれ達「CP9」がそれをさせない。

お前達を抹殺する指令が下ってる！！

チャパパ。

お前達はおれ達を倒さなければ、

ニコ・ロビンを解放する事はできないのだ。

これを見る。」

フクロウは1つ鍵を取り出した。

「鍵！？」 「なんのだ。」

「ニコ・ロビンを捕らえている海楼石の手錠の鍵だ！」

「カイロウセキ??」

「能力者の悪魔の力を無効にする石よ！」

「あんた達が海に落ちるのと同じ効力らしいわ。」

「それでロビンは今も大人しくしてるのか、

本当は強いのに!!くやしいだろうな!!」

「お前達が万が一ニコ・ロビンを救い出す事があっても、海楼石はダイヤの様に硬いので、

その手錠は永遠にはずれる事はない。」

「!!!??」

「それでも良ければ、

このままニコ・ロビンを助けに行けチャパパ。」

「じゃよこせ!!!」ドゴオン!!!

ルフィはフクロウを狙ってゴムゴムの銃ヒストルを放つが剃でかわされた。

「・・・あいつもあの技使えるみてエだ。」

「慌てるな・・・!!」

「まだこの鍵が本物だとも言っていないぞ。」

「何だとオ!??」

「別の鍵かもしれないチャパパ・・・

この塔の中におれを入れて「CP9」は5人いるが、

それぞれ一つ鍵を持ってお前達を待っている。

おれ達はチャンスをあけているのだ。

「じゃあな。」タン!ヒュツ!!!

「そう言い残すとフクロウはどこかへ消えた。」

司法の塔 内部

「うわっ!!何だこの階段、ズレてるぞっ!!」

「本当だ。」

「やっぱりさっきの衝撃は何かあったんだ!!」

大丈夫か!?!この建物!!」

俺は今チヨツパーと行動している。

たしか原作でチヨツパーはクマドリと戦い、暴走して死にかけてた憶えがあるからだ。

「ギヤアアアア。」

「!!」 「何だ?」

「!!えっ、ゾロ!!そげキング!!」

「あ!!チヨツパー!!ツバサー!!」

そこには狼とキリンに追いかけられているゾロとそげキングがいた。

「何だ!?!楽しそう!!お・・・おーい!!」

「アホオ!!手錠に注目しやがれ!!」

「「2番」の手錠の鍵探してくれーっ!!」 「!?!」

よく見るとゾロとそげキングの腕が手錠でつながっていた。

「ハアハア。」ど ど ど ど!!

「2番つ2番つハア・・・!!」

「そうか鍵と手錠には番号があるのか!!」

「みたいだね、つたくあのバカ共!!」

「何してんだか・・・!!」

「ええ!? そんな事になってんのなら!!」

「おれがあいつらと戦つよ!!」

「ばかいえ相手は二人だ。」

「もしお前がやられたら、」

「手錠のままおれ達は何も出来ず殺されちまう。」

「頼む!! お前達がおれ達の希望だ!!」

「希望!? そんなの嬉しくねーぞ!!」 『デレー』

『サンジ、ナミ、フランキー。』

「誰かが“2番の鍵?”を手に入れたら、」

「すぐここへ届けてくれ!!!」

『頼んだぞ!!!』

「一番早く鍵を手に入れそうなのは・・・」

「サンジかな。」

「たぶん、あいつ強いし・・・」

「サンジを探そう! 頑張るぞ!! おれは“希望? だ!!”」ど
どどどど

!!

「頑張つて!!」

「ツバサもだよ。」

「冗談冗談。」

「冗談言ってる場合かよ!!!!」

“ 麦わら海賊団？ VS “ C P 9？ 開幕（後書き）

もう投稿し始めてから1週間です。早いねー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1436z/>

ONE PIECEの世界に転生

2011年12月12日00時46分発行